
万華鏡

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万華鏡

【Nコード】

N6757V

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

懐かしい父の事を思い出すとき、私は万華鏡を見つめる。

山の中腹にある森林科学館。

夏休みに行われる親子森林セミナーで木切れで作るコーナーや、万華鏡を作って遊ぶコーナーなどがあり、私は娘と万華鏡づくり、息子は夫と宝箱作りに参加した。

日頃から子どもたちを放ってばかりで、せめてもの罪滅ぼしにと考え、この夏の一泊セミナーに参加したのだ。

夫の一也は食品会社の係長、私は小学校の教員をしていて、休みはなかなかなかった。娘の華も息子の蓮も一年生の双子だ。近くに実家の母がいなければ、この子たちは育たなかっただろう。

二人の子育てはあまりに目まぐるしく、何度もノイローゼになりそうだったが、母がいつも家に来てくれた。父は早くに交通事故で亡くなり、母は女手一つで私と弟を育ててくれた。ちょうど、いまのこの子たちと同じころだった。

一年生の私は学校で給食の真っ最中に先生に呼び出され、好きなゼリーを最後に残していたのと言いたかったが、教室前に叔母が泣きはらした目で立っていたので何も言えなかった。

家に入ると、父は白い布団に寝かされていた。母が茫然として父の枕元に座っていた。

「車に追突されて、父さんの車が海に落ちてしまったの」

それでも、無傷の父は今にも起きてきそうで、私は小さく父さんと呟いた。手を顔に触れると、あまりの冷たさに怖くなり、母に縋った。

「お母さん、お父さん冷たいよ」

「うん、うん」

あとは叔母も母も声にならない声で泣き始めた。弟はまだ四歳で

客や葬儀屋が出入りするのが嬉しくて、はしゃいでいた。

「お姉ちゃん、綺麗な花がいっぱい来たよ」

飛び跳ねている弟を、誰も叱ろうとはしなかった。いずれ分かる、お父さんが起きないことが。そう考えると、余計にみんなは辛くなつた。

母と叔母は父の葬儀の費用が高いため、一番安い葬儀にしてもらうしかないと話しながら泣いていた。加害者の学生は、その日、両親に連れられてやって来た。学生の両親は大きな病院を経営していたので、葬儀の費用も今後の保障もできるだけのことはすると、頭を床にすりつけて詫びた。

母は相手の顔をしっかりと見つめ、

「私の大事な夫、この子たちの親なんです。何でこんなことで一生を終えないといけなかったのでしょうか。返して下さい。元気な夫を返して」

泣き崩れる母。父の妹である叔母も、学生の胸倉をつかんで泣いた。

母が泣いたのはその葬式が済んでからは、私が結婚した時まで見たことがなかった。

まだ、三十二歳だった。今の私と同じ歳。

初盆に母が迎え火を焚くと、風がふうつと家の中に入って来る気がした。

その夜、母が布団の中でごそごそと動き、体をこわばらせるような感覚が、隣で寝てる私に伝わって来た。その時は何も分からなかったが、大人になって、母が夫を懐かしんでいたのがふと分かった。高学年になると、子ども部屋として父の部屋を与えられた。

父の本箱には、高校の国語の教員だった父の難しい本がいっぱい並んでいた。どれもこれも教科書に出てくる作家の本ばかりだった。その奥に千代紙でくるまれた筒を発見した。

小さな穴を覗くと、綺麗な柄が廻すたびに変わるものだった。

「お母さん、これなあに」

「どこにあつたの？」

「二階の本箱の中」

「万華鏡よ」

「綺麗ね。柄が変わるの」

「そうよ、それは貴方がお腹にいた時に出張のお土産に買ってきてくれたの」

「へえ、そうなの」

母は懐かしそうに覗きながら、

「私もこれが何か分からなくて、父さんに名前を聞いたら万華鏡だつて教えてくれたの」

「ふうん」

「貴方の名前をつけるときに、父さんが私の利子という名前と万華鏡の華という字を付けたの。人生が花開くようにって」

「そうなの」

「ママ、どうしたの」

「ああ、ちよつと昔のことを思い出してたの」

娘はこの五百円でできた万華鏡に絵を描いている。側面のボール紙が娘の絵で色づけされていく。

森林センターの職員は、万華鏡に草やアリをいれてみようと呼びかけた。

「えっ、アリ」

娘は出来上がった万華鏡を持って飛び出した。

「あんまり、大きな草はダメですよ。小さく刻んで少しだけ入れてみましょう」

職員の指導する声が段々大きくなっていく。

娘は早速入れて、転びそうになりながら戻ってきた。

「ママ、すごいよ。アリがすごい」

見ると、たくさんの部屋にアリがいるかのような美しい模様が見

える。中で驚いているだろうが、アリの方も。草を入れても、それは美しく変幻自在に模様が現れる。

「華ちゃん、貴方の名前はこの万華鏡にちなんでつけたのよ」

「えっ、そうなの」

「そうよ、ママもこの万華鏡の字を貰ったの」

「おばあちゃんから？」

「おじいちゃんからよ」

娘は喜んで夫に見せに行く。

私はその後ろ姿を見ながら呟いた。

「父さん、万華鏡って本当に素敵ね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6757v/>

万華鏡

2011年8月10日13時55分発行